

平成30年度第2回

逗子市総合教育会議

平成31年3月28日

逗子市

会 議 録

平成31年3月28日平成30年度第2回逗子市総合教育会議を逗子市役所5階第2会議室に召集した。

◎ 出席者

逗子市長	桐ヶ谷 覚
逗子市教育長	村松 雅
教育長職務代理者	横地 みどり
逗子市教育委員会委員	塚越 暁
逗子市教育委員会委員	村上 朝鼓
逗子市教育委員会委員	星山 麻木

事務局

副市長	柏村 淳
教育部長	山田 隆
教育部次長	村松 隆
教育総務課長事務取扱	
学校教育課長	杵山 英延
社会教育課主幹	佐藤 仁彦
図書館担当課長	鈴木 幸子
市民協働部長	芳垣 健夫
社会教育課係長	黒川 恭祐
教育総務課主事	吉井 まどか

◎ 開会時刻 午後2時01分

◎ 閉会時刻 午後3時48分

1. 開 会

○事務局（村松次長）

それでは、ただいまから平成30年度第2回逗子市総合教育会議を開会いたします。

ただいま現在、傍聴の方はいらっしゃいませんが、お見えになられましたら傍聴席のほうにお入りいただきたいと思っております。本日の会議は会議の決定により非公開にすべき事項と思われる案件が出た場合には傍聴の方は退席いただく場合がございますことを先に申し上げます。

2. 市長挨拶

○事務局（村松次長）

それでは、初めに桐ヶ谷市長から御挨拶申し上げます。市長、よろしく願いいたします。

○桐ヶ谷市長

皆様、こんにちは。大変にお忙しい中お集まりいただきまして、ありがとうございます。この総合教育会議というものも私、初めて今回参加をさせていただくこととなります。教育委員会の皆様には、大変に日ごろにおいて本市教育行政に御尽力いただきますこと、大変心から御礼を申し上げます。

きょうの議題であります次期教育大綱の策定についても、教育委員の皆様には大変に御熱心に御意見を出し合っていたいただいたというふうに伺っております。改めて御礼を申し上げます。現在取り巻く環境というのは、少子高齢化ですとか人口減少、大変大きな課題を抱えている中ではありますけれども、何とか問題を解決しながら、元気なまちをつくっていきたいと考えているところであります。今後とも教育委員会の皆様と連携を深めながら、やはり明るい、希望の持てる逗子にしていきたいと考えておりますので、御理解のほどよろしくお願い申し上げます。ありがとうございます。

3. 教育長挨拶

○事務局（村松次長）

ありがとうございました。続きまして、教育委員会を代表し、村松教育長から御挨拶をいただきたいと思っております。よろしく願いします。

○村松教育長

こんにちは。今、市長からお話をいただきましたけれども、桐ヶ谷市長におかれましては着任後すぐに、私とお話をする時間をとっていただき、現在の教育の状況、課題、今後の展望、教育委員会としてどういうことをしたいのかというのを一番最初の段階で聞き取っていただき、限られた厳しい財政状況の中で、少しでもいい環境になるようにということで、常日ごろから配慮をいただいています。工夫したり、いろいろ中身を考えていくことで、予算的な限られたものの中でも、いい教育ができていくという示唆も私たちもいただきましたので、今日のまた話し合いも含めて、いろいろなところで市長の考えも伺いながら、私たちの意見も出し合いながら、いい会議にしていきたいなというように思います。本日はよろしくお願いたします。

○事務局（村松次長）

ありがとうございました。議事に入ります前に、本日の配付資料を確認をさせていただきます。まず、本日の会議次第、そして総合計画進行管理表、平成29年度分の抜粋版、そして現在の逗子市教育大綱、最後に逗子市教育大綱の案でございます。そして、構成員名簿を別途お配りさせていただいております。配付漏れ等ございませんでしょうか。

（「なし」の声あり）

それでは議題に入ります。ここからの進行を桐ヶ谷市長、よろしくお願いたします。

4. 議題（1）次期教育大綱について

○桐ヶ谷市長

それでは、ここから私が議事のほうを進めさせていただくことになります。皆様には積極的な御意見をいただきながら進行してまいりたいと思いますので、よろしくお願いを申し上げます。

次第に基づきまして進めてまいります。次期教育大綱についてを議題といたします。事務局のほうから説明をお願いいたします。

○村松次長

それでは、事務局のほうから、失礼して着座にて説明させていただきます。

教育大綱につきましては、平成27年に施行されました地方教育行政の組織及び運営に関する法律の一部を改正する法律に、地方公共団体の長は教育、学術及び文化の振興に関する総合的な施策の大綱を定める旨が規定されたことを受け、現在の逗子市教育大綱が平成27年に策定をされてございます。

資料の現在の大綱の1ページ目ごらんください。2番、大綱の期間といたしまして、平成27年7月1日から平成31年3月末までということが現大綱の期間となっております。また、同じページの3番、逗子市教育大綱と総合計画実施計画、基幹計画、個別計画との関係及び推進体制が規定されてございますが、こちらの記述に従いまして、まず最初にこの現在の大綱の実現状況について、資料に基づいて簡単に御説明をさせていただきたいと思っております。

別冊逗子市総合計画進行管理表平成29年度分をごらんください。こちらは平成30年9月に経営企画部企画課がとりまとめたものの抜粋版でございます。下のところに51ページと記載されたページ以降が教育大綱にもございます「共に学び、共に育つ 共育のまち」に関連する部分でございます。51ページが、この中でも基幹計画となります「共に学び、共に育つ 共育のまち推進プラン」についての進行管理表となっております。

まず、市の評価といたしまして、評価としてはB、総括的なコメントを読まさせていただきますが、どの事業も理念に沿って、おおむね順調に進捗している。評価がBである理由は、生涯学習推進プランにおいては目標に対する課題が多くあり、改善すべき点が多いこと。逗子市文化振興基本計画においては、アウトリーチ活動において市民団体等と連携し、子どもだけではなく保護者の参加を促してはどうかといった意見や、昨年からの課題である文化プラザホールの維持管理において、修繕等が未実施の箇所は把握できたが、優先順位等を示してほしいといった意見があること。また、逗子市スポーツ推進計画においては、高齢者向けのプログラムはうみかぜクラブだけの事業ではないことから、市としてどのようなプログラムが存在するか把握すべきという意見。逗子市学校教育総合プランにおいては、さまざまな取り組みがあり、一定の評価はできるものの、依然として外部に取り組みが見えないことから、情報発信の方法を再度検討する必要があること。といった評価を受けたことによることから、Bという評価になってございます。

また、真ん中の段に、それぞれの個別計画の総括結果といたしまして、生涯学習活動推進プランB、文化振興基本計画B、スポーツ推進計画B、学校教育総合プランB、社会教育推進プランAという総括結果でございます。

これにつきまして、審議会・懇話会等からの意見といたしましても、妥当と考える評価区分はBとなっております。全体としては、おおむね順調との評価は妥当である。市民の身近な生活圏の中に文化・スポーツ・学習に関するさまざまな参加機会が提供されることが、共育のまち推進の基本である。その重要性を確認した上で、全体にかかわって3つの課題が指摘された。

1、個別計画の提供する諸機会は、実質的に全ての人を対象にしたものとなっているが、特に機会から排除されがちな立場、属性、障がい者などへの着目や認識はあるか。

2、機会提供は十分にされているが、市民参加型社会の担い手育成という観点が見えていない。イベントや講座に終始せず、市民の組織化につなげることなどがどの程度意図されているのか。

3といたしまして、地域課題を担うためには、分野やテーマによって高い専門性を持った市民が必要であり、専門性のある市民育成を図る機会が必要である。公募など公平性を担保した市民参加の方法と、質保証が必要な場合の市民参加の方法は、どのように両立できるのかといった御意見が出されておりました、総括的には評価区分としてはBという評価になってございます。

以下、51ページの下段から52ページにかけまして、それぞれの個別計画の評価状況についての意見、また今年度、来年度に向けた御意見、またさらには基幹計画の今後の展開や達成に向けて、次期計画に向けた意見が記載をされております。

それ以降、53ページ以降につきましては、それぞれの個別計画や事業の進行管理の評価についてが記載されたものを今回お示しをさせていただきました。大綱にございますとおり、逗子市教育大綱の実現と、総合計画の進行管理というのが一体、連動するものということから、今回まずは御説明をさせていただきましたが、教育大綱の期間が平成30年度までとなっておりますので、現在の平成29年度分までしか総合計画進行管理、しておりません。また、平成30年度分ができた段階で、こういった会議の場等を通じて教育大綱の実現の状況について御報告をさせていただきたいと思っております。現在の大綱の状況は以上でございます。

続きまして、今回の議題にございます次期教育大綱の案についての説明に移ります。資料の教育大綱（案）と書かれたものをごらんください。ただいま御説明をさせていただきましたとおり、教育大綱は市の総合計画と連動していくというつくりとなっております。このことから、次期大綱においても、この基本的な部分に変更をいたしません。次期大綱では、その1ページ目の1、策定の趣旨の下から2段落目に記載をさせていただきました部分、平成30年度までの大綱が終了することに伴い、新たな大綱では、第1章「逗子教育ビジョン」の概念を学びの場ごとにそれぞれの発達の段階に応じて整理し、具体的に示しました。こういった趣旨での策定とさせていただきます。

また、2番に記載しましたとおり、新たな教育大綱の期間は2019年（平成31年）4月から4年間、2023年3月末までの間とするものでございます。

具体の説明に移ります。案の4ページをごらんください。現大綱の4つの発達段階での学びと、家庭教育を初めとしますそれぞれの学びの場の関係を新たにイラストで表現をいたしました。こちらにつきましては、現状下書きの段階でございまして、正式には改めて清書したものに差しかえをさせていただきたいと思っております。本日の会議には、ちょっと時間に合いませんでした。大変申しわけございません。御了承ください。

そして、この概念につきまして、5ページから7ページが今回新たに定めたいと考えております学びの場ごとにそれぞれの発達段階において獲得したいこと、理想像ということに記載をしております。案の5ページでございます。第1章に新たに3として、学びの場と発達段階のつながりという項目を設けました。家庭教育、学校教育、社会教育及び市民協働学習の学びの場において、それぞれの発達段階において獲得したいこと、理想像を次に示します。

まず、家庭教育におきまして求められるもの、獲得したいことですね、失礼しました。家庭教育の場で乳幼児期、基礎の段階では、つながりの原体験の時期ということで、親などの大人と基本的な信頼関係を育み、兄弟姉妹など周囲とのかかわりから、さまざまな人間関係を会得する。また、遊びを通して発想力や想像力を養い、自然体験を重ねることで自身も自然の一部であることを体感する。

児童青少年期。こちらは自分に自信を持ち、自立へ向かって力をつけていく時期ということで、家族から愛情、支援、承認を受け、自己肯定感を養い、家族を構成する大切な一員であることに気づき、成人期に向けて自己を形成していく。

成人期としては、自立した人間の手本となり、家庭教育の担い手となる時期であることから、家庭教育の担い手としてみずから学び続けるとともに、子どもが生活習慣や生活能力、信頼感、豊かな情操、思いやり、基本的倫理観、自尊心や自立心、マナーなどを身につけられるよう、実践をする場ということです。

円熟期。これは集大成の時期ということから、これまでの経験から家庭を見守り、支えられるよう、みずからの健康維持や精神的な成熟に向かって学び続ける成人期のサポートを行い、その時代に適した子育てなどを学び、実践する人となる。

以上が家庭教育の場で求められる理想像ということになります。

続いて、学校教育の学びの場で求められるものといたしまして、乳幼児期では、初めての集団活動に触れる時期ということで、幼稚園、保育園、自主保育などの場での集団活動により、家族以外の他者とのつながりを持ち、信頼関係を築き、友達・仲間をつくる。

児童青少年期といたしまして、知識・技能を学び、コミュニケーション、他者理解の試行錯誤を行う時期であることから、学校・家庭・地域の連携による安全・安心な環境の中、見守られ、育つ。集団生活を通じてお互いのよさを認め合いながら、社会的ルール、モラルを学ぶ。習熟度に応じた適切な指導のもと、みずから学び続ける関心・意欲・態度を育みつつ、系統的な地域・技能を継続的に学ぶ。

成人期は、学校活動を支える時期といたしまして、保護者として、また市民として、学校と信頼関係をつくり、子どもが健やかに育っていけるよう、学校活動を支援する。みずからも学びながら、子どもとともに市民として育っていく時期ということでございます。

円熟期、これは伝える時期ということから、今まで経験してきたことや、前の世代から受け継いできたことを学校活動を通じて子どもたちに伝える。地域活動に参加するなどし、学校教育を市民として支えるということでございます。

社会教育におけます乳幼児期、大人とともに生活する時期ということで、主体的となっている大人と一緒に社会の活動に参加し、地域のつながりの中で生き生きと生活する。子どもの社会性を大切にされた環境の中で、市民として生きる大人たちとともに暮らす。

児童青少年期は、さまざまな地域の取り組みにかかわるということで、地域・自然・他者・歴史等を学ぶことで、それぞれがつながっていることを実感し、社会の一員としての自覚を持つ。

成人期、市民としての役割を果たす時期ということから、状況に応じた課題を捉え、広い視野で解決策を考え、他者と共生し、社会に主体的に参加することにより、社会から期待される。これが理想像となっております。

円熟期は、つながりを強めるということで、社会に主体的にかかわり続けると同時に、成人期や次世代をサポートしていく。また、これまでの経験を社会にフィードバックし、さらなる社会教育の充実に貢献をする。

最後になりますが、学びの場、その4として市民協働学習の場においては、乳幼児期、豊かな自然、多様な大人に触れる時期ということから、市民がみずから生み出す地域での活動を通じて、地域への豊かな自然へアクセスし、多様な大人に触れ、見守られながら、遊ぶ機会を得る。

児童青年期といたしまして、市民活動に参加し始める時期。多様な芸術に触れる機会、スポーツを楽しむ機会、世代を超えた地域の市民と交流する機会を得る。これらを通じて、みずからの興味・関心を広げ、社会での役割を模索する時期ということでございます。

成人期、みずから発信者となるということで、学びの発信者、実践者として、仲間とともに地域の文化、学び合う場をつくり出し、発信をしていく。

最後になります。円熟期は、次世代を見守りつつ、みずから学び続ける時期として、経験豊かな発信者・実践者として、より俯瞰的に地域の学びを生み出しつつ、文化を継承するとともに、次世代の試行錯誤を見守り、サポートを行う。みずからもチャレンジし、生涯を通じて学び続ける時期ということで、第1章の逗子教育ビジョンの学びの場と発達段階のつながりを具体的に理想像として記述をするということが今回の次期教育大綱の改正案でございます。

事務局からの説明は以上でございます。よろしくお願いいたします。

○桐ヶ谷市長

このたびの教育大綱の見直しには、教育長を初め教育委員の皆様大変御尽力いただいたと伺っており、まことにありがとうございます。今の説明に対して御意見、御質問、また補足等ございましたらいただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

○横地委員

御説明ありがとうございました。この逗子の教育大綱、最初につくったときに、この第1章の教育ビジョンというものも並行してつくってございまして、それに携わった初期の段階、最初の段階から携わった者が今この教育の中では横地だけになっております。その辺のちょっとエピソードも御説明したいなと思います。

その当時、私より以前の4人の教育委員の中で、逗子において教育に関する行政であったりとか、何か活動の一つの指針、方向性があったらいいのではないかと。同じ方向性を持って行政や活動が展開されるのがよいのではないかと。というところで、じゃあ何がそうなのだろうかということ、各自4人、一人ずつが教育的な立場の中で、分野の中で何が課題なのかというのを出しまして、それを一つ一つ討論しながら、じゃあどういふものがあるのだろうか、じゃあということで、この教育大綱の一番最初のほうにも書いてあるのですけれども、約一年半、時には一日中、お昼御飯を挟んで一日中討論し合うような話し合いを続けてきました。その中で、一番最初に、教育ビジョンの一番最初に出てくる基本理念というところで「つながり」というキーワードが出てきたのです。なぜかという、個人個人が大切にされる世の中の中で、このつながりが希薄になっているのではないかと。というところで、「つながり」というキーワードにたどり着きました。では、どうしたらいいかと。いうところで、つながっていることに気づいてほしい、そしてそのつながりを築く、つくっていくということの教育

づくりにするのか、人づくりにするのか、すごく議論しました。最終的に、やはり人づくりだということで、この「つながりに気づき、つながりを築く人づくり」というふうになりました。

このワードが決まった後に、じゃあ赤ちゃん、生まれてから円熟期まで、どうやって学んでいって、どうやってこの社会に還元して、参加していくのだろうということで、発達段階の4つをつくり、そしてどんなところで教育というのが展開されているのかということを考えて、家庭・学校・社会・市民協働というところの場を分けました。その4つの場と発達段階がオーバーラップして互いに絡み合っていて、この教育が逗子の中で展開される大きな指針、ビジョンとして、つながりに気づく、つながりを築く人づくり。そして、また場と年齢だけではなくて、他者、自然、社会、歴史ともつながっているということも意識して書いてあります。

そんなことをつくっているところで、前市長のところでも教育大綱をつくるという話の中で、教育ビジョンがもう1年以上前から考えられていて、お互い、市長との懇談の中でその辺の意識を、共通意識もつくっていただきましたので、教育ビジョンを大綱の中に組み込んでいただいたといういきさつがあります。当時の市長、そしてまた今回のこの大綱の中にも、この教育ビジョンを入れていただき、そして、そうですね、次の段階として教育ビジョンのまたステップアップとして、今回5ページのところですね、学びの場と発達段階のつながりというところを、また現教育委員のメンバーで一つ一つ考えながら、ここの部分をつくらせていただき、そしてそれがまた教育大綱の中に融合されてきているということが今の段階であります。

ですから、私、以前の教育委員の気持ちとか思いも大分詰まっております。この教育ビジョンをつくるということは、教育委員って何なんだろうという、自分たちへの問いかけもあって、何をやっていくべきなのだろうという問いかけもあって、勉強会を開きビジョンをつくろうというふうになった教育委員としての姿勢みたいなのも含まれている結果ということになっております。ちょっと長くなりましたが、以前の教育委員の思いも含めて説明させていただきました。

○桐ヶ谷市長

ありがとうございました。もう委員の方々も交替もされていますし、当初の思いというのを横地委員のほうから熱く語っていただきました。よくよくわかりました。ありがとうございます。私も立場変わりましたが、教育大綱の説明を受け、本当に皆さんがきちんと

した方向性をしっかりやられているということ。そして、大綱そのものは頻繁に変えるべきではないという思いもありますし、その事業を継承しながら今後もさらに深化させていきたいと考えているところでありまして、ありがとうございました。

ほかに。

○塚越委員

今し方横地委員から、最初にビジョンをつくられたときの話を伺いまして、私が教育委員になったのは、そのビジョンが教育大綱として実際に運営された、運用され始めた後なのですけれども、教育大綱のリファインのタイミングが見えてくる時期でしたので、じゃあそこを、教育委員のたたき台としてどう、さらによりよいものにしていくかという議論から加わらせていただきました。最初にビジョンを見たときに、ごらんになるとおり、すきがないというか、非常に緻密に考えられて、逗子らしく、すごく浅はかな教育像ではなくて、教育の何が教育で大事にされるべきかということを深く考えられて、落とし込まれているものだなという印象を受けました。

一方で、新しくつくるプロセスにかかわってない最初の委員として教育委員になりまして見させていただくと、すごく言ってることがわかる。すごくわかるし、そのとおりだと思うのだけれども、具体的にすると、これが一体何なのだろうというのがよくわからない。そこは横地委員だったり、前委員の皆さんとも議論を随分重ねましたが、やはり教育大綱という位置づけ上、どうしても言葉をシャープにというか、絞っていかないと、具体的にやり過ぎても、大綱ではない。かといって、ざっくりし過ぎると伝わらないという、その振れ幅の中ですごく議論されたというふうに聞いていまして、でも一方で教育ビジョンの位置づけということを新しく入った身として議論したときに、ポイントになってきたのが、今のこの案の一番最後のページについている図というかですね、それぞれの複雑な物事の関係性の中で、要は教育ビジョンがあって、それが矢印から教育、最後の基本方針につながっているということなのですけれども、あと学び、4つの発達段階と4つの学びが相互に絡み合っていると。これは、一通り説明されると、すごく、まさしくそのとおりだと思うのですけれども、ぱっと聞いた感じ、どうもよくわからないというのが、私も議論の中で何回かお話を伺って、ああ、なるほどとなったのですね。そのときに、やはり今度教育ビジョン、教育大綱を新しく考えていくのだとすると、この思想そのものはすごく大事で、そのとおりだなと思うものの、お互いのつながり、ないしはこのビジョンが具体的な教育施策にどう落とし込まれていくのか。そこの補助線を引くというか、そこがよりわかりやすくなるようなものに近づけていく

ことこそが、血の通った教育大綱になるのではないかなという議論がありまして、それを実際にやっていくプロセスだと思っております。

その一つが、先ほど補助線だと言いましたけど、木の絵だったり、4本の幹が4つの場で、そこを絡まり合うように発達していくというような表現だったり、あとはそれぞれの場においてどのようなことを理想とするのかということ具体的を示していくと。また、今回教育大綱にはのってこないですけども、私どもの議論の中では、じゃあ具体的にこの教育の場一つ一つでどのような授業だったり、だとすると実際に接続されるようなものなのだろうかということ、ちょっとシミュレーションとして具体例を出してみたりしてということをやってきました。なので、ぜひ市長においては、ここの接続というところを意識したような使い方を教育大綱でしていただけたら、我々がたたき台をつくったときの意図が含まれるのではないかなと思っております、補足させていただきました。

○桐ヶ谷市長

ありがとうございます。本当に大綱の難しさと、またはっきり明らかな指針を出していくということの非常に兼ね合いの難しさ、あやが今、塚越委員のほうからおっしゃっていただきましたが、ぜひそういうものを十分に考慮しながら、実施のほうへ移していきたいと考えております。ほかに御意見はいかがでしょうか。

○村上委員

私も途中から参加をさせていただいてまして、今この一番最後のこちらの図ですね、教育大綱からの教育の基本方針のところに行く間のことを考えて、具体的に考えていこうというところから参加させていただきまして、すごい白熱した討論が毎行われていて、私も入ったときには、すごく帰りには頭が痛くなるようなくらいの感じで参加をさせていただいておりました。

そのときに話し合ったことで、大事だなと思ったことなのですけども、ただこういうものをあらわすだけではなくて、実際に教育に携わる方がこれを見て、こういう意味合いだということを御理解されたりとか、この時期でこの場ではどういうふうにとらえては考えているのだろうかということ具体的に見て、それを実践に生かせるような形をつくっていききたいねということで、落とし込みをしていました。そのときには、どういう視点で文章を書いていくとか、そういうことでいろいろ文章も考慮しながら考えてまいりました。

今回このイラストにするに当たって、もうちょっとこういう立体的に、頭の中では考えを具体的にして、縦の軸と横の軸と、この発達の軸と場等でということ考えているのですけ

れども、なかなかそれが想像がいくときに、図ではなくて、イラストのほうがいいのではないかということで、素案を考えさせていただきました。その前には、この会議の場で4つの区切りがあって、こういう段階だよねということを考えて、実際に絵に落とし込むときに、逗子の自然ということと、あと一つ一つの幹が十分に育って、一つの木になるというようなイメージを、そこで花や実をつけるというイメージで、このようなイラストになりました。

これは手書きのもので、扱いやすく、もう少し整った形にするのに、今、デジタル化で清書をしていただいている最中です。以上です。

○桐ヶ谷市長

ありがとうございます。本当に皆さんの議論が白熱しているふうが目には浮かぶようですけども、本当にありがとうございます。ほかに御意見は。

○星山委員

私は一番最後から加わらせていただきまして、現在も逗子市では教育委員をさせていただいておりますけれど、ほかの市もいろいろな動向なども理解しつつ、ちょっと逗子のどこがすばらしいかということをお話しさせていただけたらと思います。

大綱の中にたびたび出てくるキーワードで、つながるとか、それから先ほども出てまいりましたけれど、人材を育成するのは一番時間がかかるので、人づくりとか、その辺のところ非常に重要だということを認識していらっしゃるところは非常にすばしくて、市の仕事としては、どうしてもばらばらになっていて、それぞれ部署も別れているわけですけど、子どもたちはいろいろなところで、一生を通じていろいろなつながりを大事に生きていくというところで、この絵にあらわされているような筋道が示されているのは、市としてはとてもすばらしいことだと思います。示されていると当たり前のように思うのですが、意外とこの目に見えないつながりということを大切にしていらっしゃるところは少ないので、そのことに関して私はここに来たとき、とても感銘を受けました。

それから、現在やはり、ここからはちょっと私の意見ですけど、教育というのは未来だと思いますし、子どもたちというのはやはり市にとって宝物であると思います。これから新しい教育ビジョンが5年、これから先に有効であるようなものがつくられているわけですが、常に未来を見たものにしていくということが大事ではないかなと思っていまして、今、このビジョン、とてもすばらしいのですが、ほかの教育委員の方たちもおっしゃっていたように、じゃあこれをどうやってやるのかという部分と、それから誰が、どの場でやるのかということになっていくと、またばらばらになっていて、私はこの木の一番上のところがつ

ながっているというところが、とてもすばらしいなというふうに思っていて、でもこのすばらしいこの上のところでまたみんな戻っていくというか、つながって、いわゆる現在言われている多様性の尊重と申しますか、ダイバーシティーインクルージョンという多様な人たちがともに地域で生きていくという、一つの象徴がこの絵にあらわれているかなと思うのですが、じゃあこの場はどこなのかということになると、これからどういうふうにして具体的にやっていくかという議論になるのかなというふうに感じています。

ちょっと一つお願いと申しますか、市長さんをお願いというとなれなんですけれども、やはり私が逗子に来てたびたび聞いていたキーワードは、財政が苦しいという話がたびたび出てくるのですが、諸外国に比べても、教育ってやっぱり子どもにどれほど未来を託し、重要視しているかということのあらわれだと思うのですが、私は逆に諸外国なんかでは自分のお仕事で成功したり、あるいは引退なさったりした方たちが自分の地域の子どもたちのために、ボランティアであったり、あるいは寄附であったりという形で貢献していくというのは、ごく人間のあり方として当然というか、すてきな生き方というふうに受けとめられている気がするのです。逗子の方って、豊かな方が多いのではないかなと私は感じていて、それを子どもたちのために、力であれ、あるいはそうではないものかもしれませんが、貢献していただくということ、これから考えていったら、いつも財政難なので、いろいろなものをカットしていかなければいけないという考え方から、もっと市民が一人ひとり、もう少しいろいろな形で子どもたちのために還元していただければ、もう持続可能な人材育成ができるのではないかという発想転換が必要なのではないかなと考えることもあります。多分、企業とか、これから先端教育とか考えていったときに、何か逗子ならではのことができるのではないかなと、私もまだ日が浅いのですが、感じることもありまして、もし何かその辺でお考え、何か私が聞いたらあれなんですけど、何かともに考えていくというところで、何かヒントになるようなことがあったら教えていただけるとうれしいです。

○桐ヶ谷市長

今、星山委員のほうから質問がございました。確かにここ1年は財政の特別プログラムを組んで、とにかくこの危機を脱しようという1年目でございましたから、この30年度に関しては、かなり強権的なさまざまな施策を打ってきたというのが実態だろうと思います。しかしながら、おっしゃられる子どもは宝、そして将来の我々の財産ということを考えますと、まちをしっかりと一体となって取り組んでいくという、この姿勢は大事だと考えておりまして、今後の教育関係についての私の考えは、いずれ見極めをした上でちゃんと手当てはしてい

たいというのが考えであります。それを一方的に行政だけが負担をしていくという、それではなくて、どういう方法で市民が参加しながら、ある種はお金の寄附ということもあろうと思いますけれども、そうではない部分では本当に労力として提供して、そこを地域で育てていくという、そういったものが必要になってくると。いつも、どの時代も金で解決していくというには限界がくると思います。そこいらは多少時間がかかることだろうと思うのですが、その両面をあわせてどう取り組んでいくか。高齢化になっているというのは、ある種、マイナス面にとられがちですけれども、それだけ余裕のある方々がお住まいなのだという捉え方をすれば、どうやってその方々を参画していただける施策につないでいくかと。これも知恵だと思います。ですから、今どうしても、口を開くとお金がない、お金がないで事を済ませていきますけれども、いつまでもそれが通る時代ではないと考えますので、しっかりと建て直しをしつつ、あとは本当に元気な高齢者をどれだけ引っ張り込んで参画していただける、その仕組みをつくっていけるかが僕は知恵ではないかなと思いますので、そこは頑張っていきたいなと考えております。よろしく願いいたします。

ほかに、はい、どうぞ。

○塚越委員

議題の本題からそれてしまいますが、今、桐ヶ谷市長から非常に心強いお言葉をいただいたので、ぜひおっしゃってくださったことに私の意見を言わせていただければと思ひまして。本当におっしゃるとおりだと思っております。私はまだ子育ての当事者でありますけれども、お金がないし財政難だから、ちょっと市はどうしてくれるのだというスタンスではない市民が、やはりこのまちは大いなる強さだと思ひまして、行政が全て負担するという話ではなくて、市民と一緒につくっていく、市民と一緒に教育の場をつくっていく、我々一人ひとりが当事者でということを実現していくこと。そこに向けて音頭をとっていただくのが非常にありがたいことだと思ひまして、ちょうど、ちょっと事例というか、今この春休みに観光協会が主催で「わっしょい逗子海岸」という、逗子海岸でいろいろな、私どもの団体を含めて、ほぼボランティアで子どもたちが集う場をつくっていますね。それが一昨日、雨が降って気温が10度ぐらいだったのですけれども、私どもの原っぱ大学と、とびうおクラブと、逗子のライフセービングクラブと逗子観光協会が一体となって、海に水着で泳ぐと。その後、上がってきたら海岸で、ドラム缶風呂をたいて、そこに子どもたちが入って温まって帰るといふ、要は何ということのない、それだけのイベントなのですけれども、そこに雨が降る寒い中、20名ぐらいの子どもたちが集まってきまして、皆さん大喜びで帰ったのですね。

そこに、そのような、普通だったら寒いから、風邪引くから行くなと言われるような場に、20名もの子どもたちが集まってくるという、この場の、このまちの親の、ないしは子ども自身のたくましさと、あとその場をつくったのが、どれも市民の団体なのですね。その感じというか、ものすごく大きな兆しだと思ひまして、一つの事例ではあるのですけれども、市のために、子どもたちのためにという思いは多くの市民が共有していることだと思ひますので、ぜひそちらの方向に音頭を切っていただきたいな。

あと、今回一つのポイントは、海でドラム缶、たき火、大丈夫かみたいな話とか、冬なのに、春先なのに、子どもを海で泳がせるのかみたいな、どうしてもそういう懸念の声が出てきかなものを、観光協会の音頭のもとに、寛容な空気をつくって、場を用意してくださったのですね。それがやはり肝だと思ひていまして、やれ危ないから、やれ迷惑だから。もちろん最低限の安全だったり、最低限、人に迷惑をかけないということは担保するものの、ということではなくて、やはりある程度、子育て当事者に対して寛容で、みんなで見守るという空気をつくっていただきながら、市民全員、一人ひとりが協力して、教育というものにコミットしていく。そんなまちに向かっていけたらいいなと思ひております。

○桐ヶ谷市長

ありがとうございます。自分も子育てした経験もかなり遠い昔の話ですけれども、それこそ近所一体で子育てしたというのが実感なのです。もう、家にぐちゃっと人が集まっていて、誰がだれだかわからない。でも、どの親も子どもに対しても、誰、分け隔てなく、悪いことをしていると怒っていくという、こういう子育てしながら、地域で、仲間で育てさせてもらったというのが実感でして、ついこの間もそのときの、もう40も半ばになろうとする…過ぎか、というのと会っても、もう僕なんかからすれば、小さいときの思いがすぐよみがえるような、僕はこういう孤立して子育てするのではなくて、逗子なんていうのはまさに規模的なもの、それから海あり山ありのこの環境からして、地域全部で育てていくという、この環境を最大の売りにしていく。そういうところには、当事者以外の人も大勢参画できる場があるのだと思ひますね。それをやはりもっともっと売りにしていくような、そういうものも必要かなと。それが今、塚越委員が言われたように、観光協会もその一端を担ってみたりとか、いろいろなところがそれぞれが持てる部分を少しずつ持ち寄ることで可能になっていくということだろうと思ひますね。ぜひそれは逗子の売りにしたいなと思ひます。

ほかに御意見ございませんか。

○村松教育長

つながりという言葉が盛んに議論されている、前の教育委員さんたちの勉強会のころから私も就任をして、極端に言えば定例教育委員会の後に勉強会をやったりする。定例教育委員会以上に勉強会が盛り上がっているという、タイプが違う会ですから、あれなんですけれども、そういうことについては他の自治体でも教育委員会に参加をした経験のある私としては、やはり驚きでした。

考えてみれば、つながりの手段は以前よりも今のほうがはるかにさまざまな手段があって、それが利便性が高くなっているはずなのに、でもつながりを大事にということが自然に出てこない。こういうように書かないと出てこないというのはなぜなのかなとずっと私も考えていました。日常的につながりができやすくなったからこそ、そこに対して意識が薄くなっているのかもしれませんが、それから、余りにも世の中の変化が早くて、世代間の共通な意識が、世代が違うと考えていることが違うのではないかということ、ついつい先に考えてしまうというようなことがあって、そういうようにするとこの4つの場、4つの年代というのは有効なのだろうなど。そういう視点が有効なのだろうなどというように思います。

それから、最近市長が高齢者等市民がもっとかかわる、高齢者がもっと市にかかわれる場を積極的につくるということについて言及されていますけれども、当初これの最後の円熟期が伝承する場みたいなところだったので、改めて読み直してみたけれども、ちゃんと自分が活動するということも書いてあるので、やはり年代が上がったとしても、ただ見守るスタイルだけではなくて、みずから動いてそれを、つながりを求めていくというところを強調すれば、市長が目指している高齢者の社会参画、市民参加ということについても、十分つながっていく大綱になっていくのだろうなど。ただ、もっと学校で言えば、そういう場を積極的につくり、情報発信をして、こういうことがあるので、こういう人に手伝ってくださいとかいうようなことはしていく必要があるなどというように思いますから、今後はこの教育大綱をベースに、具体化して、場面を設定していくのが私たち事務局の役目かなというように考えています。以上です。

○桐ヶ谷市長

ほかに御意見ございませんでしょうか。

○横地委員

今、塚越委員の言葉だったり、それを受けた市長の言葉の中で、そういう人材が逗子の中にいて、それを売りにしたい。それともう一つ、財政的にも、そんなにすぐに急に回復するわけではないので、その辺を市民の力を借りてというところが説明というか、お話が言及さ

れて、そういう方向でいくのはとてもいいなと思います。ただ、やはり物によっては専門性というのも必要だと思うのですね。その専門性をボランティアという、自主的に、主体的にやるという意味のボランティアはとてもすばらしいと思うのですけれども、やはりそこに財政困難なゆえにというような理由のボランティアというのは、やはり専門性と、あと継続性ということも必要なので、その辺のすみ分けだったり、構成の仕方だったり、そこがとてもこれからの課題ではないかなと思います。

やはり、つながりが子どもや、そして成熟期の、円熟期の人たちとのつながりもあり、そして専門家と、あと自主的にしたいという市民のつながりもあり、そこをどう展開するか。やはり行政、市として責任を果たしていく部分も、やはりきっちりとしていかなければならないというところもあるので、その辺をこれからどうやっていくのかなというのが楽しみでもあり、不安でもあり、楽しみでもありというのが正直な気持ちです。

○桐ヶ谷市長

ありがとうございます。本当に財政を言いわけにははいけないと思っております。例えば、財政で、それならば今度、行政間競争で、しっかりしたところにどんどん、逗子を見捨てて移り住むということも起こり得るわけですから。それと、学ぶべきときに学べなかったそのツケがですね、そのお子さんに降りかかっていっては、僕はいけないと思いますので、今、横地委員おっしゃられるように、しっかりとそこは言いわけをせず、やるべきことはちゃんとやっていくというのが行政のあり方だと。それは肝に銘じてやっていきたいと思っております。よろしく願いいたします。

御意見、ほかにございませんでしょうか。もし、また最後にお口添えいただくならばそれとして、とりあえず終了しますが、一応それでは4ページですか、絵のところですね。イラストをしっかりと清書するというので、この議題1の次期教育大綱については進めさせていただきたいというように思います。

○村松教育長

あと、改めてレイアウトしてみて、ちょっとこのページも、少し工夫するとおさまりが多少よくなる。それは事務局のほうにお願いをしつつ、体裁を整えるという意味では中身にかかわっていないので、このイラストとあわせて最終的なところをお願いしたいなと思います。

○桐ヶ谷市長

承知いたしました。それでは、よろしゅうございますか。これで進めさせていただきたいというように思います。ありがとうございます。

4. 議題（2）その他

○桐ヶ谷市長

それでは、その他を議題といたしますが、皆様から議題の案件ございましたら、いかがでしょうか。

もし、特になければ、私のほうで今、横地委員のほうからも言われました財政対策、また星山委員のほうからも言われました財政の問題、そのあたりを私のほうでちょっと報告をさせていただきたいと思います。

今、議会そして庁内でも進めております、話しておりますけれども、とにかく30年度の決算、一回しっかり出した上で、次は補正を組んで対応していきたいと考えているところであります。6月の議会にその補正を出していく予定であります。例えば、補助教員の件なんかも、とりあえず4月の段階ではスタート1名増員、正味1名分増員という格好でスタートしますけれども、いざこの4月に新入生が入った結果を見て、その他が想定よりももし特徴あるお子さんたちが多くといった判断の場合は、補正をかけて、そこは全部対応していくということであるとか…（「支援員」の声あり）支援員ですね。増員かけていくですとか、そういうことは当面、4月はその体制でスタートしますけれども、状況を見ながら6月の補正で対応していくということを考えております。

本当にその状態が厳しい状態のまま、学校の先生のほうをお願いしていても、それはやはり教育上、大変不都合もできてくるというようにも感じますので、対応していきたいと考えますけれども、何分言いわけがましくなりますが、対策をとってきた以上、その対策の結果をまず第一に確認をしていきたいというのが私の考えであります。ですので、このまま2年目もやみくもに突き進むということではなく、見極めをしながら現場の対応に合わせてやっていきたいと考えているところであります。

また、中学校給食等については、いろいろ御意見を頂戴しておりまして、まずいと、何とかしてくれと、こういう意見が議員のほうからも随分上がっていたというふうに聞いております。私は、まずは実際に食べさせてもらわないとわからないということから、沼間中学、逗子中学は行かせもらいました。あと逗子小学校へ行かせていただきました。その他はまだ新学期になってからということにさせていただきますけれども、感想はですね、僕は全然まずくない、おいしかった。もう我々の時代に、ぜいたく言うなの世界ですから、そんなもので何をこれでまずいのということになるのですが、今の子どもたちにとっては、どうもそうで

はないというのがあるのだと思いますけれども。何よりも一番残念に思ったのは、残食の多さ。これで何を食べたのというぐらい残している。あれはね、ちょっと問題があるなというように感じました。僕ちょっと勘違いしてしましてね、委託をした給食の会社が調理をしながら進めているというように思っていたのですけれども、実は市の職員がメニューから食材を調達して、加工のみを給食の会社さんをお願いしている。ですから、本当にそれはバランスですとか、今、子どもたちに必要な要素を十分配慮しながら進めているにもかかわらず、残食の多さが大変な私は残念な点でありまして、これを今期内、31年度中に何とか改善を図る段取りをとりたいたいというように考えております。これも私個人で行って食べて、1人で帰ってきて云々という、伝わらないと思ったものですから、議員の方々も2名、3名、最初は1名、次2名、3回目は3名で行きましたね。あとは教育長、部長を初め皆さんで行って、一緒に、その場で食べさせていただいた。同じものを同じ教室でみんなで食べるという、これをやって今、進めております。

いろいろな問題があろうというのを感じましたけれども、こういうのも一つ一つ解決をしていきたいと考えているところであります。何よりも、やはり現場から答えを導き出していくというのが私のやり方ですので、今後も継続して、現場と対話しながら進めていきたいと考えているところです。ぜひ皆様にもあらゆる点でお声を頂戴して、時には本当に現場の生の声を一緒に拝見しながらやっていくということをこれから継続していきたいなというように思っております。よろしく願いをいたします。

ほかに何か御意見ございませんでしょうか。はい、どうぞ。

○横地委員

財政対策について何点か御説明いただいたのですけれども、数年前に療育教育総合センターができ、それが今、稼働し、そしてあと通級が1校、沼間小学校でしたっけ、増え、すごく配慮を必要とするお子さんへの教育というのがすごく充実はしているのですけれども、ここ8年弱ですか、委員もさせていただいて、学校を回っている中で、大分若い先生たちが出てきて、ちょっと年齢の分布というか、経験の分布が離れているなというところでも感じたりしています。

ちょっとそれ置いといて、ごめんなさい、話が変になってしまったのですけれども、私の職場の中では幼・保・小の連携というところで、通級に通うとか療育・教育総合センターに足を向けるとかという、いろいろな場面に遭遇する中で、なかなか通級に結びつかない場合もあり、あと支援級じゃなくて通級だけになるとか、いろいろな親御さんのお気持ちもいろ

いろいろありますので、現場は葛藤しながらそれをやっている中で、さっき言いました若い先生たち、経験のまだない先生たちへの、そういう子どもたちへの対処の方法とか、クラス運営とかというところのスキルの伝授とか、学校内での学び合いとか、そういうところにも学校訪問のときに意見も言わせていただいたのですけれども、その辺のところも支援員がまた復活する、支援員の先生が復活するというお話なのですけれども、もう少し現場を見て対応していかないといけないのではないかなということを感じました。幼・保・小の連携の中で、親御さんの気持ちもあったりするのですけれども、会議でも先生同士で連携をしたりはしているのですけれども、幼稚園・保育園のほうから言えばアプローチプログラム、学校のほうから言えばスタートプログラムというのがあって、それをいかに融合したものがつくれないかなと思ってはいるのですけれども、お互いに忙しいというところで、なかなか実現していかないというところで、また私もこれからちょっと力にはなっていくのかなとは思っているのですけれども、その辺のところもまた追従して考えていかなければいけないかなと思っています。

あともう一つ懸念しているのが、教育というところで、とかく小学校以上になってしまうのですけれども、今度3、4、5歳の子どもたちの保育料の無償化というのがこの10月から入ってきて、その中で、子どもに対する考え方とか、子育てとか、保育園・幼稚園に対する考え方というのが、親御さん、子育て世代が大分変わっていくだろうなと私は感じています。この4月の保育園入所のところでも、その変化を感じているので、やはりこの教育行政、そして教育に携わる者として、その辺のファミリー、親御さんたちの考え方の変化だったり、価値観だったりというのを敏感に感じ取って対応していかなければいけないのかなと私は思っているのです、その辺のところも教育ビジョンにはつながりに気づくというところで、つながりというところでも一つキーワードを入れているのですけれども、ちょっと考えてというか、アンテナを張っていかなければいけないのではないかなと思って、ちょっと述べさせていただきます。

○桐ヶ谷市長

ありがとうございます。その辺の連携というのは、注意しながら進めていきたいと思えます。これに対しては何か事務方のほうで御意見ありますか。大丈夫ですか。ちゃんと連携を深めて。

○山田教育部長

そうですね、会議に出ていますと、やはり幼稚園・保育園の先生方は小学校に行ったとき

にきちっと育てましたという話ですよ。小学校のほうは、まだできてないという、こちらのほうでやりましょうという雰囲気はありますよね、確かに。その辺が、せっかくやったのがまたやり直したいな、そういう意見が出ていくのが現実的になりますけれども、その辺を現場同士の先生方が会を、年3回といえども理解し合っているという状況ですね。これは現場同士でやり、そこに校長先生も代表で入ってきていますから、こういう関係が続けば、ちょっと時間がかかりかかるとは思います、一歩進んでいく。また教育委員会に福祉部から子育てが入ってきたというところで、保育課と学校教育がかなり近く相談していますので、一歩近づいていく。幼稚園も保育園も一緒に今、園長会議もやっていますので、情報はかなり、横地委員に確認しないとあれなのですが、情報量は増えていることは間違いない。今後の展開だと思います。

○桐ヶ谷市長

この機会にどんどん職員のほうにも質問してください。

○星山委員

今の保・幼・小連携と幼児教育に関連することなのですが、今、国も小学校の前の教育に関してものすごく重点、重きを置いていて、特に親御さんですね、保護者の方にどういうようにサポートしていくか。私の専門の発達少数派の子どもたちを授かるお母様やお父様の数はますます増え続け、しかしそれは御存じない方も大変多くて、知らないということで子どもたちを追い詰めたり、先生にいろいろ心配事や不安事が膨らんでしまって、相談してしまう。それが長くなってしまったというのが、頑張っている人同士の傷つけ合いというのが日本全国起こっているわけです。それに関して逗子市は非常に先駆的に取り組んできたのですけれども、あともう一歩進めるのであれば、幼児教育とか、それから保・幼・小の連携というところは、ぜひ重点、重きを置いていただいて、そこに関して例えば逗子がリーディングシティになっていくぐらいの神奈川県…そんなことをあまり大きい声で言って…いろいろな立場が、いろいろなところに趣を置いていらっしゃるのですが、意外と小学校に上がる前というのはとても大切なところですね、つながりをつくるのも。でも、気がついていらっしゃらない方が多いので、そこはひとつちょっとお願いしたいなと個人的にも思っていましたので、これが意見1です。

それから、意見2なのですが、さっきの財政プログラム、財政の再建のところ、優先順位で特に直接的に人にかかわるところ、予算をまた戻して下さったりいろいろしていただいているのですけれども、ニーズが非常に多様になっているのと、毎年ニーズが変わって

るのですね。それはもちろんさまざまな事情があります。家庭の事情もあるし、子どもたちの発達も変わってきています。そこで、柔軟に対応できるように、もとあったものをそのままというよりは、そこでせっかくまた新しく、もし予算がつくのであれば、一回丁寧に相談して、私は効率のよい、もともと何をやっていたかといったらまたあれですけども、とにかくあるものを有効に活用していくためには、そこはちょっと丁寧にやらないと、皆さん善意で戻していただいて、それをどういうようにまた再配分するかというところに関しては、もう少し丁寧な議論が必要ではないかなと個人的には感じていますので、そこをちょっとお願いしたいなど。この2点です。

○桐ヶ谷市長

今の星山先生のこの補正云々でつける場合もですね、ただ、どこまで戻せばいいというのではなくて、現場に合わせて、それが必要なければ、もうそこはやらなくてもいいかもしれない。だから、現場をとにかく4月、5月の期間、しっかり見た上で、それを対応していこうというように考えているところです。

それと、今、僕自身は職員とランチミーティングをやっているのですけれども、きょうも言った中で、保育の人と話してましたが、親がそういう状況を認めたがらない。うちの子はそうじゃないと、こう言いつつ、なかなかそれが今度学校に上がって、いろいろ問題が起こってくる。御両親のそういう問題も本当に見受けられますというふうに現場のほうからもお話聞きましたけれども、やはり本当にそういう難しい問題なのだなど。だから、とにかくやはり現場をしっかりと見極めながら、行政としてやれるところはしっかりサポートできる体制に持っていくと。せっかく療育センターがあって、本当に周りから見ても、ひとつ頭抜いてそういう手当てとといいますかね、制度をつくっているにもかかわらず、やはりそこに行き着かない部分もあるかもしれませんので、それは現場を見ながらと思いますが、どうですか。

○山田教育部長

まさにそのとおりです。

○横地委員

ちょっと1つだけ。今、私、幼・保・小と言ったので、幼児教育になってしまったのですけれども、先生も同意見だと思うのですけれども、「乳」が入ってください。乳幼児、これのところにも乳幼児と「乳」を入れたのですけれども、もうやはり赤ちゃんのころからのしっかり考えていけば、すばらしく子どもたちは伸びる可能性を持っているので、それにはそれに携わる人たちの現場の保育士だったり幼稚園の先生だったりというところの質の向上も、

とても大切なので、現場にいる人たちが親御さんと直接かかわるものなのでね、その確保だったり、質の向上だったり、確保しないと質も向上できないので、確保も含め、とにかく「乳」というところを一つ入れておいてほしいなと思います。

○星山委員

今、市長さんがおっしゃったことと、誤解があるといけないですけれども、親というのは知らないで非常に不安になりますし、支援を受けるというのは、日本の文化の中ではネガティブに受けとめがちなのですね。それは、やはり妊産婦、妊婦さんのころから諸外国ではきちんと親にも支援プログラムがあり、社会教育としていろいろ教えているのですね。やはりそこも非常にまだ国全体が遅れているので、どなたであっても、なかなかSOSを出すのは難しいというのが文化的な背景にあると思います。ですから、そんなことも含めて、逗子市では非常に多くの方が熱心に学び、とても温かく、まさにつながってきたのですね。ここでどういうシステムをつくっていくかというのは非常に重要なところかなと思いますので、その重要性をみんなで共有できれば、これからは具体的に一步一步動いていくかなと思いますので、誰かを責めたりとか、誰かのせいにするのではなくて、先生方も、それからケアしている方も、それから一人ひとり子育て頑張っているお父さん、お母さんも、基本的には一生懸命なのだけれども、つながる手段がなかなか見つかりにくいと解釈していけば、私たちがしていかなければいけない仕事というの、おのずと見えてくるかなんていうように考えておきまして、そこに関しては本当に私もまだ浅いですが、たくさんの方がとても意欲的にお仕事をなさっていて、市民を含め、素晴らしいところだなと思いますので、この方向性はぜひ推し進めていただけたら、ありがたく思います。

○村上委員

今の星山先生がおっしゃったことと関連することなのですから、またその当事者とその周辺を支える大人ということがもう一つと、そのお話だったので、あと一つ、ともに学習する子どもたちへの教育ということも、知識として知っているということがすごく大切だと思っていて、私も学童の現場に今、働いていますけれども、そこでもやはり子どもたちの偏見の目というものがあって、子どもたちに向けて、この子はこういう特徴があって、こういういいところがあるのだよというようなことを知らせないまま、あと大人たちが頑張っても、子どもたちの中での傷つけ合いがやはり見受けられるので、子どもたちが偏見の目を持たない。温かく自分たちの仲間として、どういように扱っていいのか。子どもたちも戸惑いがあると思うのですよね。自分たちとちょっと違うということも、幼い

からこそ感じるということがあると思うので、そこを子どもたちへのケアも大切にしたいなというように思っています。

あともう2つあるのですが、もう1つは、「乳」ということなのですが、乳幼児の「乳」の部分で、逗子のこの自然を生かした自主保育というものが本当に葉山とか逗子、鎌倉というのはかなり盛んに行われていて、乳幼児の、まだ幼稚園に入らない時期から自然に触れ合ったりであるとか、あと大人同士が本当に触れ合って、それこそ市長が残されてきたときのような誰かのおうちに押しかけて、お風呂も入って、御飯も食べて帰っていくというようなことが実際、本当に一部ではあるのですが、繰り広げられていくので、そこから辺の自主保育ということも、この幼・保・小の連携の中に御視点として入れていただいて、そのまま自主保育のまま幼稚園時期も過ごして、小学校に入っていく子どももいますので、ぜひその視点も持っていただけたら、今後またどんどん広がっていくと思いますので、お願いしたいなというように思います。

あと3点目は、中学校給食のことです。私たちも入ったときに、久木中学校の学校訪問のときに全員で食べさせていただいた経験もありますし、私はPTAを小・中とやっていたので、逗P連という通称言っているのですが、逗子のPTAの連合会がありまして、そこでたしか四、五年前になると思うのですが、中学校給食が始まって、子どもたちが残す。とりたくないという。家に帰って不満を漏らすということが、やはり始まった当初あって、逗P連の会議の中で、全員が小・中のPTAの役員ですね、四役、副会長、会長とが一斉に会食をするということを行いました。そのときに、大人の口ではやはりおいしいというふうに、みんな実感として持って、それで栄養士さんもそのときにお呼びしてお話を伺ったのですが、そのときの栄養士さんの思いというものを聞いて、本当にそこで涙する保護者がいるくらい、みんな感動しまして、子どもの食体験の場ということをすごく考えていて、子どもの味から大人の味へ移る中で、家庭では味わえない、いろいろな食材や組み合わせを食べてみる。それがその人の人生を豊かにするというようなお考えのもとで考えられているということを知って、みんな一同感動したのですが、その大切さと、でもまだ子どもたちが今、残食が多い。学童から卒業していった子どもたちが帰ってきたときに、給食のことを言う言葉とかを考えてみると、やはりそこにギャップが感じられるので、私も昨年だと思うのですが、中学校給食の中間の検討委員会に参加させていただいて、思いと栄養士さんが中学生に寄り添っていくという過程も見させていただいて、どんどん改善されていていっていると、実感として感じています。その思いと、おいしさというもののすり

合わせみたいなのが、今後うまくいくといいなというふうに感じています。

以上、すいません、まとめて、いきなり言わせていただきました。

○桐ヶ谷市長

ありがとうございました。今の村上委員の子どものケアだとか自主保育の観点は、何か。

○山田教育部長

自主保育の場所なんですかね、場所の提供という意味でいくと、久木会館は地域自治の中でそういう場所を提供していると。小坪のほうでも一部見受けられます。公共的にやりますと、ほっとスペースというところまで、学校のふれあいスクールの午前中、授業中は自主保育というよりは、保育、保護者の集まりですね。先日ネットワーク会議をやりましたけれども、保護者同士の集まる場所を行政が提供して、安心して遊べる場所をつくっていると。また、公園が今、不審者とかいろいろあって、なかなか公園で集まれないというようなところもありますので、当時はプレーリヤカーというような、村上委員さんがやっていたかもしれませんが、公園で遊びを、行政がやることによって安心した、そのような形で、これは教育ではありませんが、子育ての楽しさをやっている。ここは先ほどからある育連協がメインでいろいろと事業をやっていたのですが、なかなかリーダーが出てこなかったというところで、行政の力を借りてそういうものやっていたいということなのですが、できれば行政は場所を貸し、リーダーを育て、自主的にやる場をつくっていただきたいのですが、なかなかリーダーがいないので、行政がやればやるほど、自主グループは減っていったという現状があるのです。典型的なのは子ども会ですね。やはりPTAを初めとして、役員の方が働いている方が多くなったので、なかなか時間がない。ですから行政任せになっていく。その矛盾が、やればやるほど自主グループが減っていくところがありますので、その辺が課題かなという認識は持っております。

○村松教育長

この5階に子育て支援課から保育課、学校教育課と、並んでいるという、こういうシステム、組織がなかなか県下でもないので、県の教育長が集まっても、他がやってないから話題にならないのです。共通の話題、逆に中学校給食などが話題になって、逗子はやってますよと、話しする機会があります。このシステムは大きいところでは市長部局の中に子ども育成部があったりはします。答えにならないけれども、でも、具体的な話になってくると、逗子ではこういうことをやっているのと言うと、あ、そうなのですかとあって、これは、非常に効果は上がっていると思いますし、実際にフロアにいても連携がとれている。特に最近

話題になった虐待だとか、そういうことについては児童相談所と子育て支援課と学校との連携は、当然のようにとれるようになってきましたから、あとは予算ではなくて、機能をどうやってさらに活動していくかということかなというふうに思っています。

いくつかいただいた話の中に、私の感想で言うと、予算的なものは、基本的には市長と同じ考えで、復活という言葉は使わないほうがいいのではないかなというように思うのですね。以前あったものを、より効果的に見直しながら、ちょうどいい言葉がないのですが、これは緊急財政のときに、これは個人的な意見であります、廃止という言葉の強さで相当市民の方の受け取りが、終了、中身は同じなのですけれども、必然性はもちろんあるのですけれども、そういうことで言うと、復活と言うともどおりというイメージを皆さん持ってしまって、バージョンアップになるのかどうなのかわからないですけど、というようなことをすると、例えば学習支援員さんも、制度として入れていただくと、今度人を見つけるときに、こういう形だとなかなか見つからないけど、ちょっとアレンジすると見つかるかということもあるかと思うので、アレンジした復活ですね、そんなようなことでいくといいかなというように思っています。

先日、土曜日に子ども発達支援センターの卒園式というのに参加をしたのです。ちょうど小学校に入学する前のセンターにかかわっているのですが。いろいろな障がいのあるお子さんでしたけれども、卒園式で、あそこは卒業証書は出せない、卒園証書も出せないので、色紙として園から子どもたちに渡し、それを受け取った子が司会の人マイクを借りて、自分でしゃべるのですね。それは筋書きにないので、みんなびっくりして、感動してという感じでしたけれども、あ、こんなに成長しているのだという、それをできればさっきの話、小学校に伝えて、何もできないということではなくですね、これだけ育てている子を小学校で引き続き育てるといってお互いに見ながらやっていったら、逗子らしくていいかなと感じました。以上です。

○塚越委員

皆さん関連な意見でばんばん手を挙げて、なかなか手を挙げづらい。2点ほど。いろいろ言いたかったのですけれども、皆さんいろいろ言ってくくださったので、2点ほどお伝えしたくて。1つは、今し方山田部長がおっしゃられた行政がやればやるほど、なかなか自発的なものが動きづらくなるというのは、一市民としていろいろ活動している中で、まさしくそのとおりだなと思ひまして、行政が、行政がというと、だんだん遠慮していくとか引いていく。ただ、ただ、逆に言うと、市民側で活動している中で、非常に思うのは、行政が前のめりに

出てくる必要はないのです。ただ、やってもいいという環境を用意していただく。それは何かというと、池子の森、どうぞ自由に使ってください。学校のグラウンドを自由に使ってください。蘆花公園、どうぞ自由に使ってください。そこが一番難しいと思うのですけれども、でも、そのような環境を置いていただくだけで、そのすき間にばっと入ってくる市民活動はいくらでもあって、何かそこ、勇気を持って手放してどうぞというか、責任持って管理するじゃないレイヤーで市民に託していくということができていったらいいなというのは、今の話を伺ってすごい思いましたし、市民側からすると、そうなることによって、もちろん、え、それは大丈夫なのかとか、それは営利活動じゃないのかとか、出てくると思うのですね。出てくるとは思うのですけれども、でもそこも勇気を持って手放してみると、結果としていいものが増えていくのではないかなというのは今、総論としてすごい思いました。それが1つ。

もう一つ、学校給食の件なのですけれども、私は長男が中学1年生、久木で給食をいただいております。ありがたいことに、うちの息子は非常においしいと言って日々帰ってきております。おなかすく中学校男子らしいと思うのですけれども。ただ、今、市長が先ほどおっしゃられた課題というのは、やはりきょうのキーワードになっているつながりというところに集約されるのかなと思ひまして、例えば考えてくださっている栄養士さんへの想像、親も含めてですね。とか、その先の料理をつくってくださっている方、材料をつくってくださっている方がどんな方がいて、どんな思いでつくってくださっているのかということ、あまり理解できてないというか、伝える工夫を我々がしてないということなのかもしれないのですけれども。ということが大きいのかなと。一番端的なのは、つくっている人を見に行く。その人たちに話を聞きに行き、先ほど村上委員がおっしゃられたような話を直接聞いてみるということもそうですし、あとは例えばそれこそ自分たちで限られた予算で、限られた栄養素の中でのメニューをつくってみる。それで実際調理してみるですとか、自分たちが当事者側になってみるということをやってみるとか、メニューの応募コンテストをやるとか、何というか、つくるものを変えるとかハードを変えるとか何とか方式を変えるとか、そういうことではなくて、やはりそこをつくられてきたものがどういうプロセスで自分たちのこの目の前にあるのかということを実際に学ぶ経験というのが、本当の意味での教育というか、そんなことを渡していける工夫なんかができるようになるのではないかなと。それでも、一方で息子の話を聞いていると、多感な年ごろですので、女子はなかなかいっぱい食べると、あいつはと思われるみたいな、そういう関係性もあるらしいので、何というか、我々の価値観だけを押しつけるのではなくて、あの年ごろならではの思いも聞きながら、どうやったらいい

いかというのをみんなで考える。そんなことがやっていけたらいいのではないかなと思いましたが。以上です。

○桐ヶ谷市長

今の場の提供というのは、僕も民間で見ていると、何かできないのかと、こう思いますね。中に入ると難しいなと思います。しかし、そのせめぎ合いをしつつ、何かほんと着地点はつくりたいですね。だから、自由にやり出していると、いろいろなところからハレーション、ブーイングが出てくるから、もうビッと、こうやってしまうと、これが行政側からすれば起こりがちですけども、限られたスペース、限られたものしかない中で、何でもとうまく使わないのよというのは、外にいるときはずっと思っていましたけれども。努力します。

それと、塚越委員のほうから、まさにお子さんの実体験を通してのお話をしましたけど、給食をつくっている職員の思いをもう一度改めて文章にしてね、保護者の方々にお伝えすると。村上委員がおっしゃっていたように、聞いたときは涙する人もいたという、本当にすごい、真剣にやっているわけだから、それが全然伝わっていかない間に、曲解されて、現状あるとするならば、本当にそういう努力をどこかでしてみる。それともう一つは、じゃあ、この予算でつくってみろよといって、つくれるかどうかでね、実験してみると。これも本当に一つかもしれません。いろいろな方法をとって、やはりそれが思いが正しく伝わり、それが食育になるように努力はしてみたいと思っています。批判は簡単なのですよね。まずいとかね、これは給食をつくっている人もその献立を考えている人もかわいそうだと思います。

○村上委員

思いが熱いのです。

○桐ヶ谷市長

本当に偉いと思う。あれだけ言われたら、もうこんなのやってられないといって。いやいや、もう本当に感謝してます。

○星山委員

今おっしゃったことで、私も言おうと思っていたのですがけれども、ちょっと他市の例で恐縮ですがけれども、やはりこちらがどんなにいいと思って大人が思っても、子どもたちが求めているものが一体何なのかということは、やはり聞かないと難しいと思うのですよね。今の子どもたちも、私たちのころと違うものを食べているので、やはり子どもたちがつくった献立は、とてもよかったです。大変人気があり、きょう何年何組は何々君の採用ですといって、栄養士さんと一緒に考え、ちゃんと告知されるので、全く食べ方が違いますよね。自分たち

が考えたもので、栄養のバランスもとれていて、しかも安いとか。だから、お豆腐を使っているとか。

○桐ヶ谷市長

それ、どこでやられているのですか。食べに行きますよ。（笑）

○村松教育長

逗子市でもやっています。

○星山委員

八王子ですけど。あと、お弁当のデザインも全部生徒に、コンクールで出しているの、お弁当箱で出るのですけれども、それも全部、一番上についているデザインは、児童・生徒のものなのですね。きょうのは自分の弁当箱デザインとかと、やはりその相手に、市民活動も一緒だと思うのですけれども、相手を信頼してある程度は投げってみるというか、任せてみるという発想は、お互いにとって有効ではないかなと思うので、もしかすると給食に関してもそんな発想がお互いに出てくると、どっちがいい、悪いというのではなくて、ニーズが合ってくるのではないかなと思ったりはします。

それから、これは全くできないことなので、余談ですが、私は海外をたくさん見てきたので、給食はないのですよね。給食がないのだけど、カフェテリアがあるのですよね。カフェテリアと給食、何が違うかという、もっと食育で、いっぱいあるメニューの中から、自分が選ぶのですね。だけど、選んで、バランスよく選んだものに関しては責任を持って食べるという教育なのですね。私が一番びっくりしたフィンランドとかは、多機能になっているので、みんな一緒に食べるのですよ。保育園から高校生まで、食堂で。これから逗子でできるかどうかはさておき、ああいう一つの機能を寄せることによって、何か新しいものが見出せるというような、例えば保育所と高齢者の方が一緒に給食を食べるように、ひょっとしたら地域の子どもたちも、ふだん出会わないような世代の人たちと楽しく食べているうちに、そんな話題も自然に出てきて、ああ、昔の給食と違っておいしそうだねと誰かが言ってくれたら、おいしく食べれる子も出てくるかもしれないなんていうふうに、ちょっと新しく、多機能や多世代を混ぜていく。それが食生活にだけではないですけど、ちょっとそういう発想なんかも入ってくると、逗子だったらできることの一つかななんて考えたりはしました。すいません、思いつきで申し上げます。

○桐ヶ谷市長

課長のほうで何か、給食の今のアイデアなんかで挑戦してみようとかというのは、ありま

せんか。

○枚山学校教育課長

基本的に子どもが考えたメニューを取り入れたりとかというのは、今、栄養士はやっていますので、カフェテリアのようにはいかないですけれども。あとは村上委員がおっしゃっていただいて、すごくありがたいなというように思いました。子どもたちへの食育等に関しては、次年度は4月15日から給食が始まるのですけれども、もう既に新1年生については始まる前に栄養士が各3中学校に行って、どういう考えがあってというような形で、思いというか、中学校給食の意味であるとか意義であるとかを伝える授業を行いますもう計画しております。その食べた後にもう一度やるような形で、来年度に限らず、毎年やっているのですけれども、なかなかいろいろな状況で、残食が多いのは事実かなと思います。塚越委員が言っていたように、私ももともとずっと中学校の教員なので、20年以上教室に入って、中学生が食べている状況を見ると、やはり塚越委員が言っていたような、思春期独特の状況というのも否定できない事実ですし、いろいろな条件が重なって、今の状況だなと。いろいろな工夫であるとか、できることというのはかなりできているかと。メニューも、食べていただく…食べていただくというのは、皆さん召し上がっていただいていると思えますし、逗P連の会議、17日にあるのですけれども、そこでは40食以上を用意できないか、食べたいというような依頼もありますので、食べてはいただいているのですけれども、単発なのですね。1カ月とか2カ月とか食べていただけると、かなり中学生…中学生というか、決して子どもに寄せているわけではないのですけれども、子どもが好むようなメニュー、和食中心ではあるものの、いわゆる白い御飯、一汁三菜という形ではなく、かなり洋食というのですかね、焼きそば、スパゲティー、ハンバーグ、ピラフのようなもの、あるいは混ぜ御飯のようなもの、かなりメニューもより取り見取りで、それほど比較的年配の方が、昔食したようなメニューとはちょっと違うので、それぐらい召し上がっていただくと、かなり工夫されているというのはわかっていただけるのですが、なかなかうまく伝わっていかないのが現状かなと思います。

○桐ヶ谷市長

僕も学校が始まったら、また行かせてもらいます。それとね、本当に僕、聞いてびっくりしたのだけれども、栄養士、その人は毎日その給食を食べているのですよ。だから、ランチミーティングのときは別のものを持ってきたけど、きょうは別ですと言って、あれは休みだからだ、今、休みだから食べてないけど、給食を毎日彼女は食べています。いや、そこまで

しているのというぐらいね、びっくりしました。もうちょっとそれがね、実るようにしていきたいなと思います。

ほかに。

○村上委員

先ほど場のことについてお話があったと思うのですが、やはりそれを自由に使えない壁をつくっているのが責任ということで、本当にそれで全てが片づけられるというような形で、行政が責任を負わなければいけないものに関して、本当に行政が責任を負わなくちゃいけないのというように、いつも疑問に思うことがあります。一昔前、自分たちの子どものころであれば、校庭で何か自由に遊んで、けがしたら本当にけがと弁当は自分持ちということで、自分持ちだったのですが、今、それを行政に、多分モンスターペアレンツと言われる方かもしれないのですが、言うことがあって、そのために一部の人のために全てできなくなってきているということが本当にもやもやするところではあるので、もう少し市民にも責任を持つような方向で、自分の責任は自分で持ちましょうというふうに言えるような世の中になればいいなというように思っています。

○桐ヶ谷市長

これに対して、副市長いかがですか。

○柏村副市長

そういう社会であればいいなと。決してそういうように皆さん思っただけませんか、行政が制限するような状況になっていくのではないかと考えます。村上委員がおっしゃるように、行政としても皆さんが責任を持っただけであれば、どうぞ自由にお使いくださいという形になるのですが、先ほど塚越委員も言われていました池子の問題についてもそうですが、自然公園として開園して、いかに自然を守りながら皆さんに利用していただくかというところのバランスです。その辺のバランスのとりようがなかなかできないという状況なので、現在はこのような使い勝手の悪い公園となっているというところでございます。

○桐ヶ谷市長

僕もだんだんわかってきましたよ。

○村上委員

子どものころから自分のことは自分で責任とれるような子どもたちを育てられるようにしていければ、未来は明るいのかなと、少し思いました。

○桐ヶ谷市長

でも、それは本当にね、みんながそういう方向に行って、そういう人たちもやっぱりそうだよねと納得していただくまで、大変な道のりはあると思うのだけれども、どうやってやるかですよ。

○村松教育長

市長が、いつもできないというのではなくてどうやったらできるかということを考えてということで、池子の森の自然公園の、学校はおかげさまで申請をして使わせていただく場面があるのです。学校が許可されるのは、引率とか、それから教員の人数とか、そういうことについて一定の保障をこちらが計画を立てているということだと思っているので、それに準ずる団体とかですね、そういうようなところがまずは実績をつくっていくようになるのかなと思いますけれども、これはまた管理をしていく側のいろいろな事情もあると思いますので、少なくとも学校はきちんと使わせていただいたときに、きちんとした実績を残し、何のトラブルもなく、評価が高くなることで、じゃあ広げられるかという土台をつくるような、そういう役目かなというようには思っています。

5. 閉 会

○桐ヶ谷市長

大変に盛り上がっておりますけれども、そろそろ時間が迫ってまいりました。どうしても最後一言言いたい、これだけは言わせろという方、いらっしゃいましたらどうぞ。

ありがとうございます。一応きょうこれで総合教育会議、終了とさせていただきますけれども、本当に私も初めてでしたが、何かもっと無制限一本勝負なんていうぐらいやってもおもしろいかなと思うぐらい、いろいろ御意見頂戴して、ありがとうございます。この後はですね、31年度の総合教育会議、今のところ2回開催をするという予定であります。期日はまた。

○村松教育部次長

改めて別途調整させていただきます。

○桐ヶ谷市長

ということでございます。

それでは、以上をもちまして30年度の第2回逗子市総合教育会議、残念ですが、これで終了とさせていただきます。ありがとうございます。どうもお世話になりました。ありがとうございました。